

《論文》

本学における「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス 1」の 授業実践報告

宗宮 悠子, 三木 ひろみ

A Teaching Report on “A Study of Sports Teaching Materials:
Dance 1” at our University

Yuko SOMIYA, Hiromi MIKI

キーワード：教材研究, ダンス, 授業実践報告

Key Words: Teaching Materials, Dance, A Teaching Report

〈要項〉

本授業の課題は、授業を通じて、ダンス授業の体験と、教師としてダンス授業を行えるようにするための指導案の作成という2つの学習内容を取り扱わなければならないことである。

本授業は、教職課程の中の「各教科の指導法に関する科目」であり、体育の運動領域として位置付けられていることを十分に考慮しているため、現行の学習指導要領に示されている内容を基に展開している。ダンスの楽しさを体験するとともに、その経験を通じて中学校及び高等学校の保健体育で学ぶべき学習内容を学び、求められている学習成果をあげられるような指導方法を受講生に伝えなければならない。また、現状として、指導案の書き方を教えるために多くの時間を費やすことになってしまい、本来この授業でしか学べないダンス学習の意義を理解し、楽しさと求められる学習成果が保証できるような教材の工夫や指導方法を学ぶための時間が十分取れないことも問題であると考えられる。

1. 「体育」におけるダンス

本論文での「ダンス」は、中学校（平成29年度改訂）及び高等学校（平成30年度改訂）の科目「保健体育科」の学習指導要領に示されてい

るダンスを指す。中学校の教科としての保健体育は「体育分野」と「保健分野」に、高等学校の保健体育は科目「体育」と科目「保健」に分かれている。中学校の「体育分野」及び高等学校の科目「体育」は、いずれも、「A 体づくり

運動」, 「B 器械運動」, 「C 陸上競技」, 「D 水泳」, 「E 球技」, 「F 武道」, 「G ダンス」, 「H 体育理論」の8つの領域で構成されている。

中学校においては, 第1学年及び第2学年においては, 「A 体づくり運動」から「H 体育理論」までのすべての領域について, 全ての生徒に2学年間にわたって履修させることになっており, 第3学年においては, 「A 体づくり運動」及び「H 体育理論」については全ての生徒に履修させるが, 「B 器械運動」, 「C 陸上競技」, 「D 水泳」及び「G ダンス」については, これらの中から一つ以上, 「E 球技」, 「F 武道」についてはいずれか一つ以上を, それぞれ選択して履修できるようにすることとなっている。

高校においては, 「A 体づくり運動」及び「H 体育理論」については, 中学校同様各学年において全ての生徒に履修させる。入学年次においては, 中学校第3学年同様, 「B 器械運動」, 「C 陸上競技」, 「D 水泳」及び「G ダンス」の中から一つ以上, 「E 球技」, 「F 武道」のいずれか一つ以上を選択して履修できるようにすること, 2年次以降は, 「B 器械運動」から「G ダンス」までの中から二つ以上を選択して履修できるようにすることとなっている。

「ダンス」は, 創作ダンス, フォークダンス, 現代的なリズムのダンスで構成されている。これら3つの中から選択して履修できるようにすることとされている。また, 学校や地域の実態に応じて, その他のダンスについても履修させることができる(文部科学省, 2018; 文部科学省, 2019)。

中学校(文部科学省, 2018)の「ダンス」では, 「イメージを捉えたり深めたりする表現, 伝承されてきた踊り, リズムに乗って全身で踊

ることや, これらの踊りを通じた交流や発表ができるようにすることが求められる」(p.168)。高等学校(文部科学省, 2019)では, 「感じを込めて踊ったり仲間と自由に踊ったり, 自己や仲間の課題を解決したりするなどの多様な楽しさや喜びを味わい, 「それぞれ特有の表現や踊りを身に付けて交流や発表をする」ことなどができるようにすることが求められる」(p.156)。

ダンスの学習指導の内容は, 他の運動領域と同様, (1) 知識及び技能, (2) 思考力, 判断力, 表現力等, (3) 学びに向かう力, 人間性等の3つの柱で整理されている。

2. 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の位置づけ

「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」は, スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科の2年次を標準履修年次として, 自由科目として開設されており(流通経済大学スポーツ健康科学部, online), 保健体育の教員免許状(中学校教諭一種免許状・高等学校教諭一種免許状)取得のための教育課程表においては, 「各教科の指導法に関する科目」として位置付けられている。したがって, 主に中学校・高校の保健体育科の教員を目指す学生が受講することが多い。「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の受講生は, コロナ禍以前は, 例年10名程度であった。

スポーツ健康科学部では, 「ダンス」の実技科目が設置されている。しかしながら, 実技科目「ダンス」を履修していない学生も「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」を履修することが可能であることから, 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」は, 実技科目「ダンス」と関連性を持たせてはいない。

3. 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の目標と構成

「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」（1単位）は、全15回の授業で構成されている。授業を通じて達成することを目指している到達目標として、以下の4つを設定している。

- 1) 中学校及び高等学校の学習指導要領に示された内容を理解する
- 2) 具体的な指導計画を作成し指導実践ができる
- 3) 模擬授業を展開することができる

4) 主体的な学修態度を身につける

上記の到達目標を達成するために、15回の授業を表1のように構成している。

表1から分かるように、中学校及び高等学校の学習指導要領に示されている「ダンス」を構成する3つのダンス、創作ダンス、フォークダンス、現代的なリズムのダンスを全て取り上げている。

全15回の授業では、体育の中の「ダンス」とはどんな位置づけなのかを整理する（第1回/第2回授業）。そして、フォークダンス（第3

表1 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の構成

回	テーマ	学習内容と方法
1	オリエンテーション	講義の説明 中学校・高等学校における「ダンス」の役割について
2	ダンスの指導内容について	中学校及び高等学校学習指導要領のダンスの指導内容について理解する
3	フォークダンスの授業展開の体験	フォークダンスの授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
4	フォークダンスの授業展開	フォークダンスの授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
5	現代的リズムのダンスの授業展開の体験	現代的なリズムのダンスの授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
6	現代的なリズムの授業展開①	簡単な繰り返しリズムで踊る授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
7	現代的なリズムの授業展開②	ロックやヒップホップなどのリズムの特徴をとらえて踊る授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
8	創作ダンスの授業展開の体験	創作ダンスの授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける。
9	創作ダンスの授業展開①	即興的に表現するダンス授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
10	創作ダンスの授業展開②	変化をつけた一流れで表現するダンス授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
11	創作ダンスの授業展開③	動きを誇張したり繰り返したりして表現するダンス授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付ける
12	中学校におけるダンスの授業展開	中学校におけるダンスの授業展開を考え指導案を作成する
13	高等学校におけるダンスの授業展開	高等学校におけるダンスの授業展開を考え、指導案を作成する
14	ダンスの授業展開における《導入》部分に使用するコミュニケーションダンスの考案①	高等学校におけるダンスの授業展開を考え、指導案の提出。コミュニケーションダンスをグループで考案する
15	ダンスの授業展開における《導入》部分に使用するコミュニケーションダンスの考案②	コミュニケーションダンスをグループで考案し、発表する。

回/第4回授業), 現代的なリズムのダンス(第5回/第6回/第7回授業), 創作ダンス(第8回授業/第9回/第10回/第11回)それぞれのダンスについて, 授業の展開の仕方と指導方法を学習し, 授業展開を体験している。

体育の授業は, 一般的に授業時間の流れに沿って, 「導入」「展開」「まとめ」の3つで構成されている。「スポーツ教材研究Ⅳ: ダンス1」では, 授業の「導入」部分と, 「展開」の中で当該授業の主たる学習内容について学ぶための教材について学ぶことに重点を置いた。例えば, フォークダンスの授業の教材として, 各国の様々な舞踊について視覚教材を使用し, さらに, 歴史背景まで触れる学習活動を行った。

「スポーツ教材研究Ⅳ: ダンス1」の授業を通じて, 「ダンスに正解はない」「ゴールフリー」であることを強調している。「ダンスの評価ポイント」については, 恥ずかしさを超えて思いきり表現できているかといった重要ポイントを押さえながら, 体験することで, ダンスに対する受講生の苦手意識を払拭するように授業を組み立てた。

本授業の最後には, ダンス授業の「導入」部分で使用する教材として, コミュニケーション

ダンスを, 受講生自身がグループで考案して発表した。こうした活動を通じて, 受講生が中学校及び高等学校のダンス授業の指導案が書けるようになることを目指した。

以下の節では, 各回の授業の概要について説明する。

4. 「スポーツ教材研究Ⅳ: ダンス1」の授業の概要

1) 第1回 オリエンテーション

第1回の授業では, 本授業のオリエンテーションとして, 中学校・高等学校における「ダンス」の役割について説明する。「なぜ, ダンスなのか?」という疑問について大学教員が解説している。また, 授業の評価方法なども同時に説明する。毎回の授業の終了時に受講生に授業カードに記入させるため, 用いる授業カードについて(表2参照)の説明も行う。

2) 第2回 ダンスの指導内容について

第2回の授業では, 中学校及び高等学校学習指導要領「保健体育」に示されているダンスの指導内容について説明する。平成元年, 平成10

表2. 本授業で使用する授業カード

授業カード			
_____ 時限 _____		_____ 学科 _____ 年 _____ ゼミ	
日付	体調	授業内容	感想<記憶に残る場面・言葉など>

年の学習指導要領の改訂では、中学校第1学年では武道・ダンスから一つを男女共修で選択履修、第2学年以降は球技・武道・ダンスから2つ選択することとなっていた。平成20年度学習指導要領改訂以降、中学校においては、第1学年及び第2学年で「武道」「ダンス」を含む全領域が必修となり、中学校第3学年以降は、領域を選択して履修することとなった。「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」では、ダンス必修化の意義や、目的、さらには男女共修の在り方などを確認している。

3) 第3回 フォークダンスの授業展開の体験

第3回の授業では、フォークダンスの授業について理解することを目的としている。実技科目のダンスを受講していない学生も履修しているため、受講生の中には初めてダンスの授業を経験する学生も存在する。まずは、数種類のフォークダンスを体験し、さらにはフォークダンスの歴史的背景などをレポートにまとめることを課題とすることで、フォークダンスについての理解を深める。

この回では、教員がフォークダンスの授業を教授し、学生は授業を生徒として体験することに徹する。国内外のフォークダンスが多く存在することを理解し、その国の文化や歴史についても学ぶ。《マイム・マイム》は「荒地を開拓し、水が引かれた時の喜びの様子」(菊池, 2012) や、《ソーラン節》の「北海道沿岸部で歌い継がれてきたニシン漁についての民謡」(菊池, 2012) について触れ、さらに動きにも、文化的背景が組み込まれていることを知る。そうすることで、ただの動きの模倣から、感情が追加されたダンスと変わることを理解さ

せる。

まず初めにフォークダンスを学習することで、フォークダンスを通じてダンスの構成、隊形なども学ぶことができる。フォークダンスの構成や隊形は、その後で学習するダンスの創作活動にも活かされてくるので、ダンスの構成や体験について知識として学ばせることが大切である。

大学教員からフォークダンスの指導を受けた後、6～8人程度のグループに分かれ、大学教員が提示したフォークダンスの中から1つ選択して、視覚教材を使ってグループでフォークダンスの練習を行う。また、レポート課題として、グループで選択したフォークダンスについて調べてレポートにまとめることを課した。

4) 第4回 フォークダンスの授業展開

第4回の授業では、第3回授業と同様にフォークダンスの授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付けることを目的とする。そのため、2つグループを対にして教師役と生徒役とし、教師役のグループが生徒役のグループに、自分たちのグループが習得したフォークダンスを教えることとした。生徒役グループの学生は、教師役のグループの指導を受けた後、ワークシートに、「相手のグループのフォークダンスについて学んだこと」「教え方の良かったところ」「教え方の改善点」を記入し、教師役のグループにフィードバックする。

各グループの持ち時間は15分間とし、短い時間で教えるポイントとして、大学教員からは、例えば、ヒール・ポイントやトゥ・ポイントを使うときに「かかと、つまさき、とんとんとん！」(菊池, 2012) というように、伝わりやすい言葉を効果的に使うことをアドバイスし

た。生徒役のグループが練習するときも、覚えやすい言葉のフレーズを使用すると初心者でも覚えやすいということも、ここで学ぶ。

2つのグループの教えあいが終了した後、指導の仕方や言葉かけなど、どんな些細なことでも良かったと思うことを相手のグループに伝えるよう促した。このフィードバックを活かし、1回目とは異なるグループと対になってもう一度教えあう。授業全体の最後のまとめとして、大学教員からは、より多くのフォークダンスに触れること、それぞれのフォークダンスの歴史やその背景にある文化を学ぶことの必要性を再度強調し、さらに教え方の工夫などについて説明した。

5) 第5回 現代的リズムのダンスの授業展開の体験

第5回の授業では、現代的なリズムのダンスの授業について理解することを目的とする。まず、大学教員から、現代的なリズムのダンスの授業のねらいは何かを理論的に説明する。現代的なリズムのダンスはストリートダンスと同じだと勘違いされることが多いので、こうした考えを払拭するために、丁寧な説明を心がけている。現代的なリズムのダンスで大切なのは、様々なリズムにのって「自由に」動きを工夫して踊り、仲間と交流するダンスであるということである(本村・戸田, 2003)。「流行しているような、特定のダンス・スタイルや洗練されたテクニックを覚えて踊るというよりも、自分らしくリズムにのって自由に踊ることを大切にすると、技能の有無にかかわらず、誰もが『踊る喜び』(本村・戸田, 2003)を体感することができることを伝える。本授業回では、まずはその「踊る喜び」を受講生に体感してもらえ

ように教員が主体となって授業を展開する。

6) 第6回 現代的なリズムの授業展開①

第6回の授業では、簡単な繰り返しのリズムで踊る授業の展開の仕方を理解し、指導方法を身に付けることを目的とする。そのために、本授業では色々なリズムやステップに触れる。この際、全員が同じ方向を向いて動きを覚えるのではなく、円を作って全員の顔が見えるような配置で様々なリズムを体験する。1曲通して流れを止めずにリズムにのることで、ダンスが苦手な学生や恥ずかしさの残る学生に、「こんな自分でも1曲できた!」という感覚を体験させることを目的とする。授業展開①では、教員がリーダーとなり、学生は基本的には教員の真似をさせる。こんな動きやリズムもあるという気づきを大切にさせる。「全身を使って踊るうちに、段々と楽しく」(中村・宮本, 2015)なるということと、「特定のダンス・スタイルを指すものではない」(村田, 2002)ということを重視して、受講生に身体を使って体験させる。

7) 第7回 現代的なリズムの授業展開②

現代的なリズムのダンスについては、『『ロック、サンバ、ヒップホップ』といった現代的なリズムのダンスは、時代の『今』の感覚と踊りへの原初的なエネルギーから生まれた自由なダンス』(2002, 村田)として位置づけられ、現行学習指導要領でも現代的なリズムのダンスにおいて上記3つのジャンルを取り扱うよう例示されている。第7回授業では、「リズムダンスの学習においては、リズムや音楽が内容を決めだす視点」(村田, 2002)ということをもまえた上で、音楽に身体をのせ、自由な発想で踊ることを体験する。

第7回では、アイスブレイクを利用しながら、4人～6人程度のグループに分かれ、メンバーが順番にリーダーになって動きを提示し、沢山の動きを表出できるようにする。良い動きが出た場合は、大学教員が受講生全体に伝え、その動きのどんな部分が良いのかなどの具体的な解説を行い、評価のポイントについても説明する。

8) 第8回 創作ダンスの授業展開の体験

第8回の授業では、創作ダンスとは何かについて解説する。視覚教材を使いながら、表現することについても触れる。〈テーマ〉〈モチーフ〉〈フレーズ〉〈イメージ〉などの用語を解説し、解説に併せて視覚教材も使用する。〈テーマ〉とは、作品の題材、〈モチーフ〉とはその作品を印象づける動き、〈フレーズ〉とは一流れの動きの連続、〈イメージ〉とは作品をより具体的に表現するためのヒントであると説明する。

授業の後半では、大学教員が主体となって、創作ダンスに苦手意識のある受講生でも呼応して動きを体験できるようにする。特に、受講生がスポーツ健康科学科の専攻であることから、様々なスポーツの動きを援用した動きを工夫し、創作ダンスを身近に感じられるように留意した。

9) 第9回 創作ダンスの授業展開①

第9回の授業では、即興的に表現するダンス授業の展開を体験する。アイスブレイクを利用しながら、今まで組んだことのない仲間とのグループを作り授業を進める。感情に焦点をあてて「喜怒哀楽」を動きで表現させる。さらにより相手に伝わるように、マイムにならないよう

に誇張・スピードの変化などを意識させて、さらに動きをブラッシュアップさせる。そこに、ストーリーを追加して、1つの作品を創らせる。その際に、演劇のようなマイムにならないように留意する。体の使い方が一定にならないように、〈捻る〉〈回る〉〈飛ぶ〉〈捻じる〉〈小さくなる〉〈大きくなる〉など、動きの誇張についての助言を積極的に行う。

10) 第10回 創作ダンスの授業展開②

第10回の授業では、変化をつけた一流れで表現するダンス授業の展開を体験する。前回と同じグループで、「四季」を全体のテーマとする。各グループで選んだ四季に関連するキーワードをどんどん出していき、そのキーワードを基に1つの作品の方向性を決める。その後、〈フレーズ〉を創作する。さらに1つのフレーズが単調にならないようにスピードの変化をつけるよう助言する。助言をふまえてもう一度グループワークを行い、ブラッシュアップさせる。そののち、グループごとに発表をさせる。良かったところなどを他のグループからその場で聞く。さらに、教員からよりよくなるための助言をその場で行い、さらにその場で修正させて他のグループに見せることで、創作ダンスにおける評価のポイントを理解させることが同時にできる。

11) 第11回 創作ダンスの授業展開③

第11回の授業では、動きを誇張したり繰り返したりして表現するダンス授業の展開を体験する。第11回では2人組でワークを行う。初めに体ほぐしを行うことで、心もほぐれ相手との距離が近づく効果があることから、本授業で体ほぐしの効果も体験する。

体ほぐしの後、「ミラー」を行う。「ミラー」とは、向かい合ってお互いの動きを鏡のように真似をする教材である。また、応用として、相手と正反対の動きをする、鏡の世界から飛び出すなどのイメージを加えて動きを発展させる。このように、1つの教材から応用・発展まで体験することで、創作ダンスがより自由でゴールフリーであることを体感させるという目的がある。この時、ペアで、どんなことが難しいと感じたか、どんな言葉がけが印象に残ったかなどについて話し合い、他のグループにも発表する。授業中にこうした活動を行っている時の教師の評価ポイントは「子どもたちがいかに仲間と協力し合って、オリジナル性の高いダンスを作り上げるか」(菊池, 2012)であることを説明する。創作ダンスにおいて仲間と協力することとは何か、個性を認めるとは何かということも、教員から受講生に説明する。

12) 第12回 中学校におけるダンスの授業展開

第12回の授業では、中学校における創作ダンスの授業展開を考えさせ、指導案を作成させた。指導案は、「導入」「展開」「応用」「まとめ」で構成させ、これまでの授業で体験してきた活動や教材をふまえて作成させた。指導案の作成にあたって留意するように強調したことは、創作ダンスの目的を把握した上で、より自由度の高い活動を組み込みながら、活動している生徒にON/OFFのメリハリとつけさせる工夫を入れることである。受講生は、指導案を90分間の授業時間内で作成し提出する。指導案は教員が添削して次の授業で返却する。

13) 第13回 高等学校におけるダンスの授業展開

第13回の授業では、高等学校における現代的なリズムのダンスの授業展開を考えさせ、指導案を作成させた。指導案は、「導入」「展開」「応用」「まとめ」で構成させ、これまで体験してきた内容をふまえて作成させた。指導案の作成にあたって強調したことは、現代的なリズムのダンスの目的をふまえた上で、特定のダンスジャンルにこだわらず多様な「リズム」に触れることを意識して、子ども達の達成感が味わえる内容を組み込むようにすることである。前回同様、受講生は90分間の授業内で指導案を作成し提出する。指導案は教員が添削して次の授業で返却する。

14) 第14回 ダンスの授業の《導入》で使用するコミュニケーションダンスの考案①

第14回の授業では、高校のダンス授業の「導入」で行うコミュニケーションダンスを、グループで考案させた。コミュニケーションダンスは、導入部分で行い、心と体がほぐれクラス全体でコミュニケーションが取れる簡単な動きの連続のダンスである。コミュニケーションダンスを考案する前に、受講生は、教員が考案したコミュニケーションダンスを体験する。教員が用意した音楽を用い、8カウント×6の動きの連続を創作し、1曲通してペアを変えながらコミュニケーションを図れるようにすることを伝えた。強調したことは、難しく考えずに、楽しく1曲弾み続けられるようにすることである。4-5人のグループに分かれて、30分程度で創作する。次の発表に向けて教員の前で発表し、教員からのフィードバックを受ける。

フィードバックを参考にして各グループで修正し、次の発表に備える。

15) 第15回 ダンスの授業の《導入》で使用するコミュニケーションダンスの考案②

第15回の授業では、前回の授業で考案したコミュニケーションダンスをグループで発表し、よかったところ、改善できるところなどについて、他グループから意見をもらう。発表されたコミュニケーションダンスの中から、評価の高いものを教員が選び、クラス全体で実践してみる。

最後に、これまでの15回の授業の内容を全体的に振り返る。そして定期試験の代わりに、第12回、第13回で作成した指導案の最終修正版を期日までに提出させて、「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」を終了した。

5. 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の学習成果の評価

「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の成績評価の評価項目と評価得点の配分は、授業への組状況（50%）、課題レポート（30%）、指導案（20%）とした。

本授業によって、学習成果として、受講生のダンスに対する意識を根本的に変えること、「恥ずかしさ」を超えて授業作りができるようになること、ダンスの授業の目的を踏まえて、ダンスはゴールフリーの学習であり互いの個性を認めることのできる種目であると理解すること、が達成できると考えている。

受講生の出席状況はおおむね良好で、ほとんどの学生が9割以上出席している。受講生が考

案したコミュニケーションダンスは、教員が考慮するように指摘した「すぐに覚えられる・互いの顔を見て踊れる・1曲を通して色んな人とコミュニケーションが取れる」の点をおおむね考慮して創作できていたかがポイントとなる。

また、受講生が提出したダンスの授業の指導案を添削して返却しているが、指導案作成について、受講生は、本授業内で紹介した教材を取り入れるということではできているが、挑戦的な新しい教材を検討する学生は少ない。但し、本授業での指導案作成のポイントとしては、新しい教材を検討するよりも、ダンス授業の組み立てについて紙面で理解すること、そして評価のポイントについてきちんと抑えられているかがポイントとしている。

6. 「スポーツ教材研究Ⅳ：ダンス1」の授業実践と課題

本授業の課題は、授業を通じて、ダンス授業の体験と、教師としてダンス授業を行えるようにするための指導案の作成という2つの学習内容を取り扱わなければならないことである。

本授業とは別に担当している実技「ダンス」の授業では、ある程度の運動量を確保した上でダンスの楽しさを伝えることを重視している。実技の「ダンス」授業でも、受講生はダンス授業を体験することができるが、学習指導要領に示されている学習内容や体育授業としてのダンスの位置づけを考慮して実施しているものでない。したがって、実技の授業を受けている受講生の中には教員志望の学生も含まれているが、実技の「ダンス」授業で指導しているダンスを、教員になってから体育授業で使わないように注意している。一方、「スポーツ教材研究

IV：ダンス1」は、前述のように、教職課程の中の「各教科の指導法に関する科目」であり、体育の運動領域として位置付けられていることを十分に考慮しているため、現行の学習指導要領に示されている内容を基に展開している。「スポーツ教材研究IV：ダンス1」では、ダンスの楽しさを経験するとともに、その経験を通じて中学校及び高等学校の保健体育で学ぶべき学習内容を学び、求められている学習成果をあげられるような指導方法を受講生に伝えなければならない。ここに難しさがある。

また、「スポーツ教材研究IV：ダンス1」の受講生には、教員志望の学生が多いが、指導案の書き方を知らないあるいは理解していない学生が多く、指導案の書き方を教えるために多くの時間を費やすことになってしまい、本来この授業でしか学べないダンス学習の意義を理解

し、楽しさと求められる学習成果が保証できるような教材の工夫や指導方法を学ぶための時間が十分取れないことも問題であると考えられる。

引用・参考文献

- 菊池由見子：中学校ダンス指導のコツ。株式会社ナツメ社：東京，pp81-119，2012。
- 中村和彦，宮本乙女：絵とDVDでわかるスポーツルールとテクニクーダンスー。株式会社学研教育出版：東京，pp49-pp50，2015。
- 文部科学省：中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編。東山書房：東京，2018。
- 文部科学省：中学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編。東山書房：東京，2019。
- 本村清人，戸田芳雄：新しい課題に対応する 中学校保健体育科の授業モデル③現代的なリズムのダンス。明治図書出版株式会社：東京，pp8-32。
- 村田芳子：最新楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス。小学館：東京，pp6-13。
- 流通経済大学スポーツ健康科学部（online）https://www2.rku.ac.jp/class/course_summary/yoko-spo-2021.pdf